

新一星

友だち

ここは街なかにあるビルの一室だが、防音の設備がしてあって、なかは割合に静かだった。ひとり机にむかっていた年配の精神分析医は、扉にノックの音を聞き、それに答えた。

「どうぞ、おはいり下さい」

そして、読みかけの文献を片づけながら、来客を迎えた。はいつてきて頭をさげたのは、三十すぎと見える男。服装はきちんとしていて、礼儀も正しかったが、思いつめたような表情を浮かべていた。医者は椅子をすすめ、声をかけた。

「どんなご相談でしょう」

「じつは、こちらの看板を見てお寄りしたわけですが……」

と、男は言い出しにくそうようすだった。だが、最初は何の患者もそうなので、医者は物なれた口調で住所、名前、年齢などを聞き、いつものように話をすすめた。

「なにかでお悩みなのですね」

「ええ……」

「ご遠慮なく打ち開けてください、いままでになにか、ご病気をなされたことは……」

医者は鉛筆とメモを手に、相手の答を待った。男はちよっととまどい、まばたきをしながら言った。

「いや、問題なのは私についてではないのです」

「これは失礼しました。とすると、奥さんのことでしょうか」

「妻も同じことで悩んではいますが、夫婦関係のことではありません。じつは、うちの子供、五つになる女の子のことなのです」

「そうでしたか。で、お子さんがどうかなされたのですか」

「ええ、それが……」

男はまた口ごもり、医者はうながした。

「お話しになってみて下さい。医者としての立場上、お聞きしたことを口外はいたしません。その点をご心配なく」

「でも、信じていただけるかどうか。あまりにもばかげたことです」

「そんなことを気になさらないように。ばかっているかどうかは、お話をうかがった上できめることです。また、ばかっていたとしても、その対策の指示をお教えるのが私の仕事です。ひっこみ思案では、解決は得られませんよ。お子さんが、どうなさったのですか」

「それが、遊び友だちが……」

「なるほど、悪い友だちができ、その影響を受けたのですね」

「よいのか悪いのかは、なんとも言えません。なにしろ、妖精なのですから」

男は少し身を乗り出したが、医者は落ち着いて言った。

「それはそれは。しかし、幼いうちは空想力が強いものですし、さわぐほどのことはないと思います。人形だって草花だって、子供にとっては、みな自分と同等な遊び相手ですよ」

「ええ、それぐらいは私も知っています。しかし、これはべつです。実在の妖精です。そうでなかったら、ああはなりません」

「あなたまでが信じていらっしゃるようですね」

と医者に指摘され、男は手を振った。

「いや、私は信じません。しかし、子供が妖精と遊んでいることは、どうも信ぜざるを得ないような気分なのです。どうせ、想像で作らあげたのでしょうか」

「そのへんの事情を、もう少し詳しく順序をたててお話し願いますよ」

「このところ、子供が自分の部屋でおとなしくしているのに、妻が気がついて聞いてみたのがはじまりです。なにをしていたの、とね。すると、妖精と遊んでいたのよ、と答えたのです。もちろん、妻も私もすぐに言いかけました。そんなものはいないんだと」

「いままでに、そんなことがありましたか」

「ありません。聞きわけのいい、奇妙な空想をすることもない子供でした。いや、いまでもそうです。しかし、妖精に関する限り、決してなっとくせず、存在を主張しつづけるのです。そこで妻と相談し、先生をお訪ねしたわけです」

「なるほど。で、どんな妖精なのです」

「子供があまり主張するので、ここへ連れて来い、と言ってみました。だが、子供ひとりの時でないと出現しないそうです。これでは話になりません。子供の説によると、小さくて、すきとおるような翼をそなえ、長い杖を手にしているそうです。……どうしたものでしょう。妖精が実在するはずはありませんから、あの子の頭がおかしくなったのでは……」

男はいくらか興奮したが、医者は冷静に話をつづけた。

「その結論を急いではいけません。頭ごなしに子供を押さえつけず、論理的に言いかせるべきですよ。たとえば、どこからやってきたのかと質問して……」

「それは聞いてみました。ある日、本を開いたら、ページのあいだから現われたそうです。そして、またそこに帰っていくそうです。私はその本を持ってこさせ調べてみました。しかし、紙きれ一枚はさまっていず、妖精の挿画ものっていません」

「そうでしたか。むずかしいかもしれませんが、現代は科学の時代であることを、わからせるように努めてみたら……」

「それもやってみました。しかし、書物の起源はずっと昔で、そのころから存在している妖精なのだそうですよ。もっとも、この答は、子供が妖精とやりに聞いて得たものだそうです。使いなれない言葉もまざっていますし、第一、子供では思いつかない妙な理屈が通っています」

医者はずなずき、話題を少し変えた。

「お子さんはその妖精となにをして遊ぶのですか」

「本をいっしょに読むだけのようです。妖精はその持っている長い杖で、字や挿画をさし示してくれるそうです。子供の説明は変にリアルで、私たち両親をからかう芝居とは、とても思えません」

医者はまだうなずき、この質問を進めた。

「いままで、本をどのようにお与えになりましたか」

「ふつうの家庭と変りないと思います。画のはいった本を買ってやり、字を教えながら読んでやっていたんですが、いつまでもそれではいけないと考え、自分で読むようにと言いました。妖精の出現は、それからまもなくです」

「はあ……。そうすると、妖精とはあなたがた両親のことかもしれませんね。本を読んでもらえなくなった。そこで空想によって、両親の代償物を作りあげた……。長い枕は親を象徴しているようです」

「それも一応の理屈でしょうが、どうもすっきりしません。となりの部屋で、子供が話しかけている声も耳にしました。もっとも、妖精の返事は聞こえませんが……。どうしたらいいのでしょうか。このまま妖精にとりつかれて成人するのかなと思うと、気が気でありません。私の知りたいのは説明でなく、妖精を追い払う方法なのです。先生、なんとかお願いします」

男の声は大きくなった。しかし、医者は答えず、しばらく黙り、メモを鉛筆でたたきながら考えているようだった。やがて医者は、室のすみにある長椅子を指さし、男に言った。

「ちょっと、あれに横になって下さいませんか。さらにくわしく調べてみたいのです」

「しかし、変なのは私でなく、子供なのですよ。……あ、まさか、いまお話ししたことが、ぜんぶ私の妄想だと思いですか」

男はあわてた表情になった。

「そんなつもりではありません。ただ、子供は親の影響を受けやすいものですから、その関連を知りたいのです。少し時間はかかりますが、楽な気分で質問に答えて下さい」

男はそれに従い、からだを横たえながら言った。

「それで、どんなことをお聞きになるのです」

「あなたの幼かったころのことです」

「それは無理です。私はあまり追憶にひたる性質でもなく、とても思い出せそうにありません。霧にかすんだ森の奥をふりかえるようで、手のつけようがありません」

そこで医者は提案した。

「では、催眠術を使いましょうか」

「はじめての経験なので、ちょっと心配ですが、子供のためならば仕方ありません。お願いします」

男は協力的だったので、彼はすぐに催眠状態に入った。薬品の助けを借りるまでもなかった。

医者は男を幼時にさかのぼらせた。

「さあ、あなたはだんだん若くなります。五歳になりました。ひとりで本を読んでいますね」

催眠状態の男は答えた。

「はい。本を読んでいます」

「妖精がそばにいますか」

「いません。もう……」

「もうというと、いたこともあるのですか」

「はい。しばらく前まではいました」

「妖精はなにをし、どうしていなくなったのですか。それを話して下さい」

「本をいっしょに読んでくれました。十日ほどそれがつづきました。それから、あとはひとりで読みなさい、さよならと言って、ページのあいだにもどり、二度と出てきませんでした」

医者は大きくなずき、男を現在に戻し、手をたたいて催眠状態から目ざめさせた。男は目を聞き、あたりを見まわしながら聞いた。

「終わりましたか。どうでした。なにかわかりましたか」

だが、医者はいまのことには触れずに答えた。

「あまり収穫はありませんでした。しかし、お子さんの症状は、そう心配することもないと思います」

「そうおっしゃっても、存在するはずのない妖精を信じているのですよ」

不満げな男に、医者は反問した。

「しかし、そのことによって、なにか実害がおこっていますか」

「さあ……。考えてみれば、なにもないようです。だが、将来このままでは……」

「解決を急いではいけません。しばらくようすを見ましょう。一週間たってこのままでしたら、あらためて対策を考えます。それまでは、あまり逆らわないように」

「そうでしょうか……。しかし、先生のおっしゃることですから……。」

男は物足りなそうに帰っていった。

四日ほどたち、男はまた訪れてきた。医者はさりげなく聞いた。

「どうなりましたか」

「おかげさまかどうかはわかりませんが、妖精はいなくなったようです。子供の話では、ページのあいだに消えていったとか……」

「それはけっこうでした」

「しかし、気になってなりません。本当に妖精がいたのでしょうか」

「さあ、なんとも言えませんね」

と医者が答えたのを、男は聞きとがめた。

「というと、存在するかもしれないと……」

「妖精とは、おそらく人間の作りあげた妄想なのでしょう。しかし、人間というものに特有な、いい妄想ならば、追い払い消すこともないかもしれません」

「いい妄想とおっしゃると…」

「われわれは本を読み、そこから限らない知識と創造力を得ています。しかし、自分でその楽しさを味わう方法を、幼いころ、最初に手ほどきしてくれたのは、だれでしょう。考えてみたことはありませんか」

「考えてみたことはありませんが、そういわれてみると、親に読んでもらえなくなり、自分で読みはじめたころ、だれかがそばにいたような……」

「じつは私も、そんな気がするのです」

「しかし、まさか、それが本に宿っている妖精とは……。先生はそうおっしゃりたいのですか」

男は医者を見つめた。医者はつぶやくように言った。

「いや、だれにもわからないことでしょう」